

学術雑誌のこれから：雑感

芳賀 達也

学術雑誌の周辺が激しい勢いで変わっているように思える。閲覧も、投稿も、校閲もどんどんインターネット経由になっている。自分が購読している雑誌でもパラパラ目次を見るのが無くなった。パソコン画面で見の方が何かと便利だからである。その雑誌のサイトに行けば、2, 3号まとめて見られるし、印刷もパソコンから指示する方が楽だ。

問題は購読していない雑誌である。Summary だけは、そのサイトで大体見られるし、少し遅れてよければ PubMed (<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/>) で見ることができる。大概の雑誌は Summary だけ見れば十分であるが、自分の仕事に密接に関係した論文を見つけた時全文見られないのは悔しい。総合大学では沢山雑誌を購入しているのだから、殆どの雑誌の論文全文をパソコン上で検索・校閲・複写が可能である。多くの研究室ではなかなかそうは行かない。これまでは、大きな図書館から論文コピーを送って貰うのが普通であったが、時間もかかるし、送金というややこしい手間もかかる。E-mail で pdf ファイルが瞬時に送れる時代に如何にも不都合である。今や、パソコン上で誰でもどの雑誌のどの論文も見られる様にすることは技術的に可能である。それによる研究者が得るメリットも大きい。科学技術の基盤整備の格好の対象であろう。

ごく最近、無料で論文を見られるサイト一覧というホームページがあることが分かった (<http://www.freemedicaljournals.com>)。それを見ると、結構多くの雑誌が無料で公開されていることが分かる。発行後半年から1年間公開というものと、発行1年後から公開というものがあるのが面白い。どちらも、どのような思惑なのであろうか。そのホームページに、「2年以内に主要な医学雑誌は全文無料公開になるだろう。論文を公開しないような雑誌は不人気になるに違いない」とあったのには、拍手を送りたくなった。

しかし、論文を全部無料で公開すれば、雑誌が売れなくなって、立ちゆかなくなることも明白である。ではどうするか。雑誌の出版をやめるのが最も単純な解決法であろう。この到来は意外に早いではなからうか。J.Biol.Chem. 1年分のボリュームを考えると、コンピューターで簡単に検索・印刷できる時代に、あれを世界中の研究室や図書館に置くのは無駄としか言いようがない。割合早く、雑誌を買うのではなくアクセス権を買うようになるのではなからうか。出版は無くなっても論文の発表は必要なので、雑誌の編集機能だけが残ることになる。論文を審査し、採択分を決定し、インターネット上に流せばよいわけである。編集にかかる経費については広告収入が考えられる。論文の切り売りもよいかもかもしれない。Nature では、Summary だけ見せて、全文見たい場合は1論文あたり15ドルだそうである。経営者の目からは、論文の価値は売り上げ高で計られるかもしれない。Impact factor よりさらに殺伐とした感じもするが、案外さっぱりしていいような気もする。ただ、impact factor や売上高が低くとも、おもしろくて大事な論文は沢山あるということは肝に銘じておく必要はあろう。

原著論文はインターネットで見るとなっても、端から端までパラパラ見る雑誌への需要は残るだろう。本誌のような雑誌は、重厚な論文や総説ではなく、論文やトピックスの紹介、科学界の記事などを扱う、パラパラ系情報誌として価値が出てくるのではなからうか。